

<実践研究>

県立特別支援学校における組織的な授業改善と カリキュラム・マネジメントの取組に係る一考察

片岡 愛*・平川 泰寛*

本稿は、広島県立廿日市特別支援学校における授業改善とカリキュラム・マネジメントの取組をまとめた。

平成26年12月、広島県教育委員会が策定した広島版「学びの変革」アクション・プランに基づき、本校においては、授業改善等を組織的に推進するため、研究部、教務部及び管理職で構成する「学びの変革担当者会」を組織するとともに、学習指導要領改訂の方向性等を踏まえて教職員による議論を重ね、平成28年度に廿日市特別支援学校版「学びの変革」アクション・プランを策定した。廿日市特別支援学校版「学びの変革」アクション・プランは、日々の授業で使用する指導略案及び単元（題材）計画に着目し、児童生徒に育成したい資質・能力「はつかいち（働く力、つなぐ、活用、意欲、知識）」を明確にする様式を整えるとともに、毎年度、教職員対象アンケートを実施して改善を繰り返してきた。また、両輪である授業改善のPDCA サイクルと教育課程の改善のPDCA サイクルに指導略案、単元（題材）計画、授業づくり資料等を位置付けることにより、授業改善とカリキュラム・マネジメントの枠組を組織的に構築した。

キーワード：育成したい資質・能力 組織的 授業改善 カリキュラム・マネジメント

I. はじめに

平成26年12月、広島県教育委員会は、変化の激しい21世紀の社会を生き抜くための新しい教育モデルの構築を目指して「広島版『学びの変革』アクション・プラン」を策定し、これからの社会で活躍するために必要な資質・能力の育成を目指した主体的な学びを促す教育活動を推進することが示された。

このことを受けて、広島県立廿日市特別支援学校（以下、「本校」とする。）では、平成28年度に本校版「学びの変革」アクション・プラン（以下、「アクション・プラン」とする。）を策定し、後期授業から実施しており、毎年度、改善を重ねてきている。

令和元年度現在、本校のアクション・プランは、育成したい資質・能力を校名にちなんで、はつかいち（「は」働く力、「つ」つなぐ、「か」活用、「い」意欲、「ち」知識）と定め、このことを明確にした「単元（題材）計画」によるカリキュラム・マネジメント並びに「指導略案」や授業づくり資料等を活用した授業改善を図ることにより、児童生徒の人生の質の向上を図ることを目的として取り組んでいる。

また、授業改善とカリキュラム・マネジメントを組

織的に推進するため、教務部及び研究部の主任・副主任等並びに管理職で構成する「学びの変革担当者会」を組織している。

平成28年度から令和元年度までの間、アンケート調査等の根拠に基づき、毎年度、改善を図っている。

II. 平成28年度の取組

1. 概要

平成28年度当初、広島版「学びの変革」アクション・プランに係る校内研修会を実施するとともに、同年8月に本校版アクション・プランの策定に向けて、教務部及び研究部の主任・副主任等並びに管理職で構成する「学びの会」（平成29年度から「学びの変革担当者会」に名称変更）を発足した。

「学びの会」においては、アクション・プランの内容について協議を重ね、それまで本校で取り組んできたキャリア教育並びに学習指導要領改訂の動向等を踏まえた上で、児童生徒に育成したい資質・能力を校名にちなみ、はつかいち（「は」働く、「つ」つくる、「か」活用、「い」意欲、「ち」知識）と定めた。

育成したい資質・能力を明確にした授業改善を図ることを目的として、毎日実施する全ての授業において作成する指導略案に、児童生徒に育成したい資質・能力である「はつかいち『学びの変革』」を取り入れ、

* 広島県立廿日市特別支援学校

活用することとした。

具体的には、育成したい資質・能力の観点から5つの大項目（はつかいち）に整理し、各大項目に9つの下位項目を設定し、指導略案の本時の目標に関連する学習活動に①～⑨の番号を明記することとし、校内教職員への周知を経て、後期の授業から開始した。

平成28年度時点の育成したい資質・能力については、Table 1に示す。

Table 1 児童生徒に育成したい「資質・能力」

は(働く力)		①知識・行動	正しく確かにできる技能や行動を増やす
は(働く力)		②思考力・判断力・表現力	思考・判断してできることを増やす
	はつかいち「学びの革新」	③自分をつくる	主体的にできることを増やす
はつかいち「学びの革新」		④仲間をつくる	人と関わりながら思考・判断して目的に行動する
	はつかいち「学びの革新」	⑤4つの力を活用	できるようになったことを主体的に使う経験をする
はつかいち「学びの革新」		⑥授業・生活に活用	思考力・判断力・主体性を高める
	はつかいち「学びの革新」	⑦興味・関心	分かること等を自分で判断して行動する
はつかいち「学びの革新」		⑧主体性	どの場面でも通用する行動を身に付ける
	はつかいち「学びの革新」	⑨知識・技能	知識・情報を基に新たなことに挑戦して能力を高める

それまで使用していた指導略案の様式に、「はつかいち『学びの革新』」を追加し、各学習活動に番号を選択する欄を設けた。また、「前回より改善点」の欄を追加するとともに、授業評価の観点から「児童生徒は本時の目標を達成することができたか」、「目標設定や、個々への指導・支援は適切であったか」と定めたことにより、授業評価を確実にし、さらなる授業改善を図ることができるようにした。

また、「はつかいち『学びの革新』」を選択し、指導略案に記入する際の参考資料として、5つの観点に対する目標の具体例、指導・支援のポイント及びコンピテンシーを示した「指導略案別表」を作成した。具体例については、「学びの会」の小中高等部の単一障害学級及び重複障害学級を担当する教師が検討し、本校の全児童生徒に対応できるよう、6～9例作成した。

さらに、年度途中からの実施を目指したため、研究の構想を示したポンチ絵を作成し、校務運営会議において提案するとともに、校内教職員に対する全体説明

会を行って周知を図った。

2. 平成28年度教職員対象アンケート調査

平成28年度の実施状況を把握するため、教職員対象のアンケート調査を実施した。調査項目及び回答方法は、Table 2に示す。

Table 2 アンケートの調査項目と回答方法

質問項目	回答方法
所属学部	選択法
目標設定について	多肢選択法、自由記述法
授業改善について	多肢体択法、自由記述法
取組の成果について	自由記述法
アクティブ・ラーニングの推進において困っている点	自由記述法
その他、意見等	自由記述法

(1) 調査対象

広島県立廿日市特別支援学校の教職員95名（回収数73名、回収率77%）

(2) 実施時期

平成28年12月～平成29年1月

(3) 目標設定について

指導略案に示す授業改善の観点「はつかいち」の選択（①～⑨まで）で難しさや意味が分かりにくいと感じる項目で一番多かった回答は、「か（活用）⑤4つの力を活用」で32%であった。続いて、「つ（つくる）③自分をつくる」が15%、「い（意欲）⑦興味・関心」が14%となった。

(4) 授業改善について

指導略案を使用することにより、日々の授業づくりで意識して行うようになった項目は「目標設定及び提示の仕方」が44%、「振り返り、まとめの行い方」が27%、授業展開が25%という結果となった。アクション・プランで示している日々の授業の質を向上させるために、指導略案を用いて「目標の提示→活動→振り返り→活動→次時の目標の意識化→次時へ」という授業づくりが行われてきているという結果が示された。また、「主体性を引き出す指導・支援」についても23%という結果であり、多くの教職員が児童生徒の主体性を育てるための指導・支援を心がけていることが示された。

(5) アクティブ・ラーニングに有効と考えられる項目について

「主体性を引き出す支援」が45%、「体験的な学び」が27%となった。さらに高等部においては、「思考力・

判断力を引き出す発問、「課題意識をもたせる働きかけ」、「協働学習」が（高等部回答者数の）各33%であり、アクション・プランを実践する上で重要なポイントが授業で盛り込まれていることが分かる結果を示した。

(6) アクティブ・ラーニングの推進において困っていること等について

「一つの単元として、また毎時間アクティブ・ラーニングを推進することが難しい」、「何をもってアクティブ・ラーニングの授業と判断すればよいのか」、「生徒の実態による能動的な学習展開の困難さ」等の記述があった。その一方で、「児童二人の重複学級なので、常にペア学習をやっている。様々な指導方法で学習を展開できるようにしたい」、「キャリア教育で育てたい力とはどういうものなのかということに取り組んできて、総体的にキーワードは、『主体性』と思う。担任している児童の主体的な姿、目指す像はどんなものなのかをできるだけはっきりさせる」など、児童生徒が主体的に活動できる授業づくりを目指して、意識して取り組む意欲が感じられる前向きな意見も挙げられた。

その他、指導略案の作成に係る負担感及び観点の内容の精選を求める意見、授業評価欄について改善を求める意見が挙げられた。

3. 成果と課題

成果と課題については、Table 3に示すとおりであり、Fig. 1は育成したい資質・能力と学習指導要領の関係を示したものである。

授業の観点について、「アクション・プラン」（5つの観点（は（働く力）、つ（つくる）、か（活用）、い（意欲）、ち（知識）：9項目）は、平成30年度学習指導要領改訂に向けて示された「学力の3要素」である「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点と次の関係にあるため、3観点によるきめ細かい目標をたて、目標に即した指導・支援を行うとともに、学習評価を通じて授業改善を図ることとした。

具体的には、当該3観点を評価規準として設定し、単元等の評価規準を設定した上で、「本時の目標」、「個々の目標」に該当する学習活動に番号を付けて指導・支援の充実を図るものである。

Table 3 成果と課題

成果	課題
(1) 指導略案の使用により、目標の提示、振り返り等の授業展開を意識するようになったこと。	(1) 指導略案・別表の9項目の選択について、難しさや意味の分かりにくさを感じていること。
(2) 児童生徒の主体性を引き出す指導・支援を意識して行うようになったこと。	(2) 指導略案・別表からの番号選択が煩雑であり、2～3個程度又は5つの観点でよい。
(3) アクティブ・ラーニングを実践する上で重要なポイントを意識するようになったこと。	(3) 授業改善のため、指導略案の番号選択のルールを明確にした方がよいこと。
(4) アクティブ・ラーニングを意識した取組を通して、児童生徒の変容を実感していること。	(4) 指導略案「授業評価欄」が授業改善に活用されていないと思われること。
(5) アクティブ・ラーニングを意識した取組は、小中高等部を通じて、教科等を合わせた指導において行われている傾向があること。	(5) 教職員により、アクティブ・ラーニングの定義や推進方法等に係る理解に差があり、研修や教務部からの説明を要望していること。

現行学習指導要領 学習評価の4観点	はつかいち 「学びの変革」	次期学習指導要領 学力の3要素
■知識・理解 ■技能	■ち(知識)知識・情報 ■は(働く力)技能・行動	■知識及び技能
■思考・判断・ 表現	■は(働く力)思考力・ 判断力・表現力 ■か(活用)授業で活用 ■か(活用)家庭・社会 生活に活用	■思考力・判断 力・表現力等
■関心・意欲・ 態度	■つ(つくる)自分をつ くる ■つ(つくる)仲間をつ くる ■い(意欲)興味・関心 ■い(意欲)主体性	■主体的に学習 に取り組む態 度

Fig. 1 児童生徒に育成したい資質・能力「はつかいち」、平成10年度告示学習指導要領の学習評価の4観点及び平成30年度告示学習指導要領に向けて示された学力の3要素の関連

4. 改善内容

成果と課題並びに育成したい資質・能力と新旧学習指導要領との関連に係る整理に基づき、次の改善を図ることとした。

(1) 単元（題材）計画について

単元計画の様式を整えることにより、指導と評価の一体化とともに、次時の単元（題材）計画、次年度の教育課程及び年間指導計画等の改善を図るカリキュラム・マネジメントを実施することとした。

なお、成果と課題を踏まえ、「指導略案・別表」は使用しないこととした。

(2) 指導略案について

①「目標」「手立て」「評価」の明確化を図るため、「単元（題材）の目標」を加える。

②「本時の目標」「個々の目標」に該当する学習活動に「はつかいち」①～⑤の番号を付ける。

③①～⑤の番号を付けた学習活動は、指導・支援の具体的内容を記載する。

④授業評価欄は授業改善（授業目標の適切さと目標を達成するための手立ての妥当性を高めること）のために授業評価を記載することとし、具体的な改善を図るために「次時の改善点」を加える。

(3) キャリア教育との関連について

本校がこれまで取り組んできたキャリア教育と「アクション・プラン」との関係を整理する。

Ⅲ. 平成29年度の取組

1. 研究テーマに基づく組織的な授業改善等

平成28年度後期から開始した本校版「学びの変革」アクション・プランの取組を踏まえ、研究テーマを「児童生徒の意欲、主体性を育てる授業づくり～廿特版「学びの変革」アクション・プランに基づく生活単元学習の授業改善（一年次）」と設定し、知的障害教育の中核をなしてきた生活単元学習で主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこととした。

児童生徒に育成したい資質・能力（「は」働く力、「つ」つくる、「か」活用、「い」意欲、「ち」知識）を明確にした指導略案及び大幅に修正した単元（題材）計画を活用した授業改善に取り組んだ。

2. 平成29年度の研究推進

(1) 第1回生活単元学習研修会（平成29年5月）

設定した3点の協議の柱を基に、各学部で小グループを編制し、「生活単元学習」について意見交換を行った。協議の柱を次に示す。

（協議の柱）

①生活単元学習の授業で工夫していること、大切にしていることは何か。

②生活単元学習の授業を通して児童生徒に期待する姿、目指す姿は何か。

③生活単元学習を行う上で難しいと思っていることは何か。

その後、研修会で出た意見を集約し、全教職員に配付して周知を図った。

(2) 第2回生活単元学習研修会（平成29年6月）

第1回生活単元学習研修会で出された意見及び疑問

を基に、本校小学部主事が「生活単元学習とは」「単元づくりの大切さ」というテーマで研修を実施した。

また、研修の最後に生活単元学習の授業で大切に取り組みたいと思ったことをキーワードに意見交換した。

(3) 仮説、検証方法に係る研修会（平成29年7月）

各学部の研究仮説の設定に向けて、第1回・第2回生活単元学習研修会で出た意見を基に、研究部が研究仮説案を立てた。その案を基に、仮説、検証方法に係る研修会を各学部で実施し、検討し、決定した。（Table 4）

検討する際に留意した点を次に示す。

①学校の研究テーマと関連した内容であること。

②本校版「学びの変革」アクション・プランと関連していること。

③仮説については、公開授業研究会のためのみの仮説ではないこと、生活単元学習を実施する際に、全ての学級に対応できる内容であることなどを共通認識とした。

学部仮説が決定した後、決定した学部仮説について、「児童生徒のどのような姿が見られたら仮説を達成したことになるか」、「その姿を見るために大事に（工夫）しなければならないことは何か」ということについて協議し、学部仮説の検証方法を見出した。その内容をTable 5に示す。

また、本研修会において、本校で授業改善、カリキュラム・マネジメント、廿特版「学びの変革」アクション・プランを推進していく上で重要なツールは「単元（題材）計画」と「日々の授業計画（指導略案）」であることを確認した。

Table 4 平成29年度学部研究仮説

研究テーマ	研究仮説	はつかいち「学びの変革」
児童生徒の意欲、主体性を育てる授業づくり～廿特版「学びの変革」アクション・プランに、基づく生活単元学習の改善（一年次）～	小学部 児童の好きな活動や児童同士が関わる活動を設定すれば、人や物に興味・関心をもち、自ら関わりを求めたり、やってみようとしたりするであろう。	「い」意欲 「つ」つくる 「ち」知識
	中学部 生徒の興味・関心を広げたり、生活に身近な内容を取り入れたりする活動を設定すれば、生徒が自ら選択する力や生活に生かそうとする態度を身に付けることができるであろう。	「か」活用 「い」意欲 「ち」知識
高等部	問いかけや場面設定の工夫を行えば、生徒が自ら考え、判断して行動する力や、自分の考えや思いを表現する力が高まるであろう。	「は」働く力 「か」活用 「ち」知識

Table 5 平成29年度学部研究仮説の検証方法

学部	検証方法
小学部	人や物に興味・関心をもち、自ら関わりを求めたり、やってみようとしたりに係る児童の変容を、甘特版「学びの変革」アクション・プランに基づいて作成した「単元（題材）計画」、「日々の授業計画（略案）」を用いて評価・検証する。
中学部	自ら選択する力や、生活に生かそうとする態度に係る生徒の変容を、甘特版「学びの変革」アクション・プランに基づいて作成した「単元（題材）計画」、「日々の授業計画（略案）」を用いて評価・検証する。
高等部	自ら考え、判断して行動する力や、自分の思いを表現する力に係る生徒の変容を、甘特版「学びの変革」アクション・プランに基づいて作成した「単元（題材）計画」、「日々の授業計画（略案）」を用いて評価・検証する。

3. 平成29年度の授業研究

校内において、校内授業研究会及び公開授業研究会の両方を担当する学級を5学級(小学部単一障害学級、小学部重複障害学級、中学部単一障害学級、高等部単一障害学級2学級)決定した。

また、校内授業研究会及び公開授業研究会に向けて、それぞれ単元づくり検討会及び指導案検討会（公開授業研究会においては2回）を実施した。

(1) 単元づくり検討会

校内授業研究会及び公開授業研究会で実施する授業の単元計画について研究授業を実施する5学級を基に5グループ作り、各グループで検討を行った。

- ① 実施時期 平成29年8月及び10月
- ② 内容 実施予定の単元を基に、ワークシートを用い、複数グループで単元計画のリメイクを行った。ワークの内容についてはTable 6に示す。

Table 6 ワークの内容

ワーク1	単元の到達点を考える 「分かりやすい到達点を設定する。」
ワーク2	単元のリメイク 「児童生徒が言える単元名にする」
ワーク3	指導計画のリメイク 「児童生徒の学びの文脈（つながり）をつくる単元・授業」
ワーク4	授業実践に向けて 「一人一人が『できること』を発揮するための工夫を考える。」

「単元名は生徒と教師の合言葉」を意識した単元名や指導内容の充実に向けた活発な意見交換が行われた。

(2) 指導案検討会

校内授業研究会に向けては1回、公開授業研究会に向けては2回、指導案検討会を実施した。

① 実施時期 平成29年8月及び11月（校内授業研究会に向けては8月に1回、公開授業研究会に向けては11月に2回実施した。）

② 内容 次に示す指導案を読むときの4つの柱を基に検討を行った。

- ア. 研究主題を踏まえているか。
- イ. 児童・生徒の実態を踏まえ、身につけさせる内容等が明確になっているか。
- ウ. 指導方法は効果的か、工夫は見られるか。
- エ. 本時の目標、評価、学習展開及び時間配分は適切か。

また、公開授業研究会に向けた2回目の指導案検討会においては、児童生徒に育成したい資質・能力「はつかいち」に特に関連する場面を取り上げて、児童生徒や授業者の動き、問いかけ等を実際に動きながらシミュレーションし、協議・検討した。

(3) 校内授業研究会

① 実施時期 平成29年9月

② 内容 「仮説検証の柱に沿って」、「成果と思われること」、「課題点と思われること」、「今後の改善策やアイデア」の4点についてワークシートに沿って協議を行った。また、それぞれについて出された意見が「はつかいち」のどの力について関連するものなのかも併せてワークシートに記述し検討した。

4. 研究協力者ワーキングによる授業づくり資料の検討

平成29年度から30年度にかけて広島大学大学院の研究協力に係る研究協力者で構成する研究協力者ワーキングにおいて、授業改善のPDCAサイクル及び教育課程の改善のPDCAサイクルの流れに沿った「授業づくり資料」の作成に向けた協議・検討を重ねた。

なお、研究協力者とは、管理職が該当者に要請して受諾した、小・中・高等部の単一障害学級、重複障害学級を担当する6名の教諭である。研究協力者で検討した授業づくり資料4点をTable 7に示す。

また、①「目指す児童生徒の姿」及び「児童生徒に育成したい資質・能力段階表」については、Fig. 2、Fig. 3に示す。

Table 7 授業づくり資料

目指す児童生徒の姿	生活単元学習の授業において目指す児童生徒の姿を示した図
児童生徒に育成したい資質・能力段階表	「児童生徒に育成したい資質・能力『はつかいち』」の各観点を段階的に示した表
生活単元学習12年間の単元配列表	12年間で学習する生活単元学習の単元をカテゴリごとに配列した表
生活単元学習12年間の内容系統表	12年間で学習する生活単元学習の学習内容を系統的に示した表

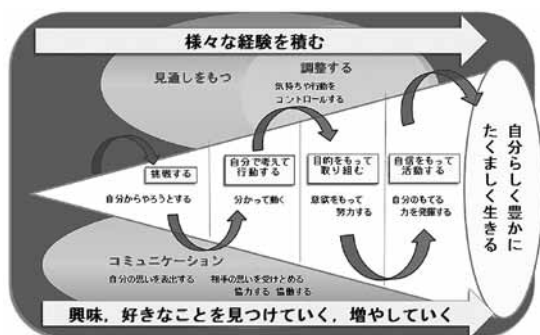


Fig. 2 目指す児童生徒の姿

廿日市特別支援学校版「育成したい資質・能力『はつかいち』段階表」

児童生徒一人一人の教育的ニーズ、特性に応じた教育を行い、その可能性を伸ばし、豊かにたくましく生きる力を育てる。

	知識・技能	思考力、判断力、表現力	コミュニケーション能力	主体的に学習に取り組む態度	生活単元学習の態度
ち	基礎的な知識を習得する力	基礎的な技能を習得する力	基礎的なコミュニケーション能力を習得する力	基礎的な主体的な学習態度を習得する力	基礎的な生活単元学習の態度を習得する力
は	基礎的な知識を応用する力	基礎的な技能を応用する力	基礎的なコミュニケーション能力を応用する力	基礎的な主体的な学習態度を応用する力	基礎的な生活単元学習の態度を応用する力
か	基礎的な知識を創造する力	基礎的な技能を創造する力	基礎的なコミュニケーション能力を創造する力	基礎的な主体的な学習態度を創造する力	基礎的な生活単元学習の態度を創造する力
い	基礎的な知識を統合する力	基礎的な技能を統合する力	基礎的なコミュニケーション能力を統合する力	基礎的な主体的な学習態度を統合する力	基礎的な生活単元学習の態度を統合する力
つ	基礎的な知識を転用する力	基礎的な技能を転用する力	基礎的なコミュニケーション能力を転用する力	基礎的な主体的な学習態度を転用する力	基礎的な生活単元学習の態度を転用する力

Fig. 3 育成したい資質・能力『はつかいち』段階表

5. 平成29年度教職員対象アンケート調査

アンケート調査（「平成29年度廿日市特別支援学校版「学びの革新」アクション・プランに関するアンケート」）

(1) 調査対象

広島県立廿日市特別支援学校の教職員105名（回収数は103名、回収率は98.1%）

(2) 実施時期

平成29年12月初旬～12月下旬

(3) 内容

Table 8 に示すとおり。なお、課題を記入した場合は、改善のための代替案を記入する調査様式とした。

授業改善については、「指導略案」を使用することにより、日々の授業づくりを意識して行うようになった結果、75.7%の教職員が児童生徒の変容を実感していることが判明した。

カリキュラム・マネジメントについては、「単元（題材）計画」の使用により、「単元づくりが容易になった」79.8%、「次時の単元の改善が図れた」80.9%、「年間指導計画の改善が図れた」81.8%との結果から、概ね順調であることが判明した。

目標設定について、育成したい資質・能力「はつかいち」選択の際に難しさや意味の分かりにくさを感じる項目は、多い順から「か（活用）〈授業で活用〉〈家庭・社会生活に活用〉」、「つ（つくる）〈自分をつくる〉〈仲間をつくる〉」であったため、「か（活用）〈知識・技能の活用〉」「つ（つなぐ）〈共同（一緒に物事を行う）・協同（力・心を合わせて物事を行う）・協働（同じ目的のために対等な立場で協力して共に働く）」に改善することとした。

Table 8 アンケートの調査項目と調査内容

質問項目	調査内容
目標設定	育成したい資質・能力「はつかいち」の課題
授業改善	授業づくりで意識するようになった内容見られるようになった児童生徒の変容（具体例） 「主体的・対話的で深い学び」実現に有効な指導内容
カリキュラム・マネジメント	「単元（題材）計画」作成・評価の課題 「単元（題材）計画」使用による効果等
教育研究	生活単元学習の授業改善に係る成果と課題
その他意見等	「主体的・対話的で深い学び」実現に係る課題 アクション・プランに係る意見

また、全教職員が共通理解するため、育成したい資質・能力「はつかいち」を構造的に示す必要性が挙げられた。このことについては、研究協力者ワーキングにおいて議論を重ねて作成した「資質・能力段階表」を「単元（題材）計画」に活用することとした。小学部から高等部卒業までを想定して第1段階から第5段階まで設定しているものであるが、生活年齢にこだわらず、児童生徒の実態又は単元の展開に応じて柔軟に考える必要があるものであり、その概要は、Table 9 に示すとおりである。

6. 成果と課題

授業改善及びカリキュラム・マネジメントに係る成

果と課題については、Table 9に示すとおりである。

また、この結果並びに授業づくり資料を踏まえ、単元（題材）計画の修正内容を Fig. 4に示す。

Table 9 成果と課題

	成果	課題
授業改善について	単元（題材）計画を使用することにより、「単元づくりが容易になった」79.8%、「次時の単元の改善が図れた」80.9%、「年間指導計画の改善が図れた」81.8%など、カリキュラム・マネジメントが大幅に促進された。	単元（題材）計画の様式について、「カリキュラム・マネジメント（改善）」欄の「直後の単元（題材）の改善内容」「関連する単元（題材）の改善内容」が書きづらいと感じている教職員が多い。
カリキュラム・マネジメントについて	<p>(1) 指導略案を使用することにより、日々の授業づくりを意識して授業改善を図った結果、75.7%の教職員が、児童生徒の変容があったと感じている。</p> <p>(2) 指導略案を使用することにより、日々の授業づくりで意識して行うようになった内容は、多い順から「授業展開」「主体性を引き出す指導・支援」「目標設定及び提示の仕方」。(主体的・対話的で深い学びの実現に有効と考える内容は、多い順から「主体性を引き出す指導・支援」「思考力・判断力を引き出す発問」「体験的な学び」であり、差があることが明らかになった)。</p>	<p>(1) 目標設定について、育成したい資質・能力「はつかいち」を選択する際に難しさや意味が分かりにくいと感じる項目は、「興味・関心」がゼロである以外は、全ての項目について回答があった。多い順から「か（活用）」31、「つ（つくる）」25、「は（働く力）」14、「ち（知識）」5、「い（意欲）」3（合計回答数78）。</p> <p>(2) 育てたい資質・能力「はつかいち」が何に該当するか悩んだり、分け方が難しいと感じたりするとの意見が多くあるため、全教職員が共通認識して授業改善できるよう「はつかいち」を構造的に示す必要がある。</p>

7. 改善内容

(1) 目指す児童生徒の姿、育成したい資質・能力の明確化について

育成したい資質・能力を明確にする必要があるため、アンケート結果に基づいて「はつかいち」を見直すとともに、研究協力者により作成された「目指す児童生徒の姿」及び次の「資質・能力段階表」に基づき、単元（題材）計画及び指導略案の様式を改善してアクション・プランの充実を図ることとした。

なお、「つ（つなぐ）」は、共同（一緒に物事を行うこと）、協同（力・心を合わせて物事を行うこと）、協働（同じ目的のために対等の立場で協力して共に働くこと）のように、内容の違いに留意が必要である。

また、段階表は、小学部から高等部卒業までを想定して第1段階から第5段階まで作成しているが、生活年齢にこだわらず、児童生徒の実態又は単元の展開に応じて柔軟に段階を捉える必要がある。

(2) 様式等の変更について

アクション・プランの実施フロー及び単元（題材）計画に段階表を明記し、単元（題材）計画の「カリキュラム・マネジメント（改善）」の内容は「次年度の年間指導計画の改善内容」のみとすることとした。

資質・能力段階表	知識及び技能		思考力・判断力・表現力等		主体的に学習に取り組む態度	
	ち【知識】	は【働く力】	か【活用】	い【意欲】	つ【つなぐ】	
	知識・情報・技能・行動	思考力・判断力・表現力	知識・技能の活用	興味・関心、主体性	共同・協同・協働	
第5段階	<input type="checkbox"/> 必要な情報を収集する力	<input type="checkbox"/> 臨機応変に対応する力	<input type="checkbox"/> できるようになったことを応用・発展させる力	<input type="checkbox"/> 目的を持って自ら行動（「あんな風になりたい」「一人できる」）	<input type="checkbox"/> 社会に貢献する力（相手を思いやり、為になることをする）	
第4段階	<input type="checkbox"/> 必要な情報を取捨選択する力	<input type="checkbox"/> 正確な課題遂行能力	<input type="checkbox"/> 自分のもてる力で課題に対処する力	<input type="checkbox"/> くりかえしやってみる（「またやろう」）	<input type="checkbox"/> 仲間と協働する力（仲間と同じ目的に向かって働く）	
第3段階	<input type="checkbox"/> 基礎的・基本的な学力（書く、聞きとる、読み取る、見る、数える）	<input type="checkbox"/> 集中力・忍耐力	<input type="checkbox"/> より良くするための工夫する力	<input type="checkbox"/> 積極性（「できた」）	<input type="checkbox"/> 仲間と協働する力（仲間と心と力を合わせて活動する）	
第2段階	<input type="checkbox"/> 学習活動への興味・関心（探求する）	<input type="checkbox"/> 支援を要求する力	<input type="checkbox"/> 体験したことを思い出し挑戦する力	<input type="checkbox"/> 自発性（「やってみよう」）	<input type="checkbox"/> 仲間と共同する力（仲間と力を合わせて活動する。思いを伝える）	
第1段階	<input type="checkbox"/> 基本的な生活習慣（集団のルール、マナー、学習姿勢）	<input type="checkbox"/> 自分が得意なことを知る	<input type="checkbox"/> 体験したことを振り返り繰り返す力	<input type="checkbox"/> 興味・関心（「楽しそうだな」）	<input type="checkbox"/> 仲間と一緒に取り組む力（場を共有する）	

Fig. 4 チェック欄を設けた単元（題材）計画（抜粋）

IV. 平成30年度の取組

1. 概要

平成30年度は、引き続き本校版「学びの変革」アクション・プランの取組を踏まえ、研究テーマを「児童生徒の意欲、主体性を育てる授業づくり～廿特版『学びの変革』アクション・プランに基づく生活単元学習の授業改善(二年度)」と設定し、改善したアクション・プランに基づき、生活単元学習で主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこととした。

2. 平成30年度の研究推進

(1) 研究推進に係る研修会(平成30年4月12日)

平成30年度研究推進計画に基づいて、全教職員を対象として、平成30年度の研究計画に係る説明を行った。

また、平成30年度から採用することとした授業づくり資料4点及び昨年度のアンケート結果で明らかとなった課題から修正を図った単元(題材)計画についても説明を行い、教職員間の共通理解を図った。

(2) 学部仮説決定に係る研修会(平成30年4月27日)

平成29年度の研究成果を基に、学部会において、各学部の仮説決定のための研修会を行った。

平成30年度も仮説検証型で研究を行うことを確認し、グループ別にホワイトボードを用いて、意見交換及び協議を行った。仮説を立てるに当たり、授業で目指す児童生徒の姿をイメージする際に「目指す児童生徒の姿」を、「その姿を見るために必要な私たち教師の指導・支援を考える際に『育成したい資質・能力』はつかいち』段階表」を活用した。

3. 平成30年度の授業研究

(1) 1学年1授業

平成30年度は、1学年1授業を実施することとした。1学年1授業とは、小学部から高等部までの全12学年において、授業者を1名決定し、学年全体で生活単元学習の授業研究を行い、授業改善を図るものである。

6月から10月までの期間で、単元(題材)計画と指導略案を活用した授業研究を行った。また、12学級のうち、4学級(小学部2学級、中学部1学級、高等部1学級)については、12月16日(土)に開催した公開授業研究会において、公開研究授業を実施した。

また、年度当初に、研究部が既存の授業改善シートを「育成したい資質・能力『はつかいち』段階表」を基に修正を図り、授業観察及び研究協議会で活用することとした。

(2) 研究方法

平成29年度に引き続き、単元づくり検討会、研究授業、研究協議会の流れで、各学年において授業研究を行った。学部研究仮説を Table 10に示す。

単元づくり検討会及び研究協議会でのグループ協議の際に使用するワークシートについては、内容の修正を図るとともに、協議時間を示す等、効率的かつ効果的に実施できるように工夫した。

また、単元づくり検討会で協議の際に記入したワークシートは学部内で回覧した。さらに、研究協議会で使用したワークシートについては、研究部がまとめを作成し、学部会において報告を行い、共有を図った。

Table 10 平成30年度学部研究仮説

研究テーマ	研究仮説
児童生徒の意欲、主体性を育てる授業づくり ～廿特版「学びの変革」アクション・プランに、基づく生活単元学習の改善(二年度)～	小学部 他の単元や学習活動とのつながりをもたせ、繰り返し取り組む活動を設定すれば、学習活動への見通しをもち、自分で考えて動いたり、やりたい気持ちを表現したりするであろう。
	中学部 学習活動にペアワークやグループワーク等、他者と関わる場面を設定することにより、自らの思いを伝えることができるであろう。
	高等部 生徒が自ら考え、主体的に取り組み、成功(失敗)体験を積み重ねることができる場面を設定することにより、自信をもち、仲間と同じ目的に向かって働く力が高まるであろう。

4. 平成30年度教職員対象アンケート調査

アンケート調査(「平成30年度廿日市特別支援学校版『学びの変革』アクション・プランに関するアンケート」)

(1) 調査対象

広島県立廿日市特別支援学校の教職員107名(回収数は103名、回収率は96.3%)

(2) 実施時期

平成30年12月初旬～12月下旬

(3) 内容

Table 11に示すとおり。なお、課題を記入した場合は、改善のための代替案を記入する調査様式とした。

授業改善については、「目指す児童生徒の姿」を使用により、「単元計画作成時に、単元終了後の児童生徒の姿をイメージして授業を計画することができた」90.9%、「単元計画作成時に単元終了後の児童生徒の姿をイメージすることに役立った」88.5%、「資質・

能力段階表」の使用により、「児童生徒に育成したい資質・能力を明確にすることができた」89.6%との結果から有効であることが明らかになった。

Table 11 アンケートの調査項目と調査内容

質問項目	調査内容
目標設定	育成したい資質・能力「はつかいち」の課題
授業改善	授業づくりで意識するようになった内容 見られるようになった児童生徒の変容(具体例) 「主体的・対話的で深い学び」実現に有効な指導内容
カリキュラム・マネジメント	「単元(題材)計画」作成・評価の課題 「単元(題材)計画」使用による効果等
教育研究	生活単元学習の授業改善に係る成果と課題 本校の研修会の在り方に係る成果と課題
その他意見等	アクション・プランに係る意見

また、「単元(題材)計画」の使用により、「次時の単元の改善が図れた」77.8%、「単元づくりが容易になった」86.6%、「年間指導計画の改善が図れた」83.2%との結果から、概ね順調であることが判明した。

しかし、単元(題材)計画の「3 カリキュラム・マネジメント」欄において、多面的・総合的に評価する様式になっていないなどの課題が明らかとなったため、学習指導要領に示されている6つの視点を参考に様式を改善することとした。

5. 成果と課題

成果と課題は Table 12 に示すとおりである。

「目指す児童生徒の姿」及び「資質・能力段階表」の導入により、単元終了時の児童生徒の姿を具体的にイメージし、付けたい力を明確にすることができた。

また、組織的に「単元(題材)計画」及び「指導略案」の様式を改善してきたことにより、授業改善のPDCA サイクルと教育課程の改善のPDCA サイクルをつなぐ枠組を構築することができた。

しかし、「目指す児童生徒の姿」については、学校教育目標、学部教育目標等との整合性を図るとともに、「廿日市特別支援学校『学びの革新』アクション・プランの実施フロー」(以下、「実施フロー」という。)に明記する必要があることが明らかになった。

さらに、単元(題材)計画の「3 カリキュラム・マネジメント」欄については、学習指導要領の内容を踏まえて改善を図るとともに教育課程の改善の手順が明らかになるよう実施フローに明記する必要があるこ

とや、学習評価が個別の指導計画に反映される必要があることが明らかになった。

Table 12 成果と課題

	成果	課題
「『目指す児童生徒の姿』及び「はつかいち」について	「目指す児童生徒の姿」の使用により、「単元計画作成時に、単元終了後の児童生徒の姿をイメージして授業を計画する意識をもつことができた」90.9%、「単元計画作成時に単元終了後の児童生徒の姿をイメージすることに役立った」88.5%、「資質・能力段階表」の使用により、「児童生徒に育成したい資質・能力を明確にすることができた」89.6%など、有効であることが明らかになった。	「資質・能力段階表」の「ち(知識)」第1段階「基本的生活習慣(集団のルール、マナー、学習姿勢)及び第2段階「学習活動への興味・関心(探究する)」、「か(活用)」第2段階「体験したことを思い出し挑戦する力」及び第3段階「より良くするため工夫する力」について、選択を迷うと感じている教職員が一部いることが明らかになった。
単元(題材)計画について	単元(題材)計画の使用により、「次時の単元の改善が図れた」77.8%(平成29年度調査:80.9%、「単元づくりが容易になった」86.6%(平成29年度調査:79.7%)、「年間指導計画の改善が図れた」83.2%(平成29年度調査:81.8%)など、単元(題材)計画が授業改善や教育課程の改善に有効であることが明らかになった。	「3 カリキュラム・マネジメント」欄の記載が、指導の評価や児童生徒の評価にとどまり、単元の評価が記載されていないため、年間指導計画の根拠として意見が十分に集約できていない。また、学習指導要領に示されている6つの視点から多面的・総合的に評価する様式になっていないなどの課題が明らかになった。

6. 改善内容

アンケート調査に基づく実施状況等を踏まえ、次年度から次のとおり改善することとした。

(1) 「目指す児童生徒の姿」及び「はつかいち『学びの革新』資質・能力段階表」について

「資質・能力段階表」の内容について見直しは行わず、「目指す児童生徒の姿」については、学校教育目標等を踏まえ、「自分の生活を豊かにする」を「自分らしく豊かにたくましく生きる」に修正するとともに、実施フローに明記することとした。

また、学習指導要領の内容を踏まえた学習評価や教育課程の改善が明らかになるよう実施フローを修正してアクション・プランの充実を図ることとした。

(2) 様式等の変更について

学習指導要領、授業改善及び教育課程の改善を明確にするため、アンケート結果に基づき、単元(題材)計画の「3 カリキュラム・マネジメント (Fig. 5)」欄の内容を次のとおり改善した。

1	学級、教科・領域等	(変更なし)	
2	指導計画	(変更なし)	
3	カリキュラム・マネジメント	何が身に付いたか	学習評価(単元(題材)目標の達成状況)
		何を学ぶか	資質・能力の育成のために、授業時数や授業形態は妥当であったか。
		実施するために何が必要か	資質能力の育成のために、指導内容の工夫として、学部・家庭・地域社会との連携・協働は妥当であったか。
		次年度の本単元への改善案や要望	

Fig. 5 カリキュラム・マネジメント欄の修正

V. 令和元年度の取組

令和元年度は、引き続き、本校版「学びの变革」アクション・プランの取組を踏まえ、研究テーマを「児童生徒の意欲、主体性を育てる授業づくり～廿特版『学びの变革』アクション・プランに基づく生活単元学習の授業改善(三年次)」と設定し、知的障害教育の中核をなしてきた生活単元学習で主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこととした。

これまで組織的に改善を図ってきたことにより、組織的に「単元(題材)計画」及び「指導略案」の様式を改善してきた。構築することができた授業改善のPDCAサイクルと教育課程の改善のPDCAサイクルをつなぐ枠組(Fig. 6)に基づいて、研究推進を行うこととした。

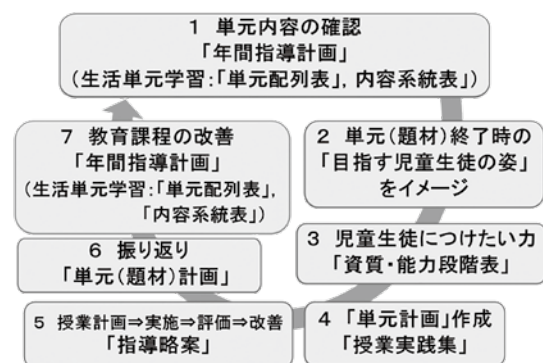


Fig. 6 授業改善のPDCAサイクルと教育課程の改善のPDCをつなぐ枠組

VI. 考察

広島県教育委員会が平成26年12月に策定した「広島版『学びの变革』アクション・プラン」並びに学習指導要領改訂の方向性等を踏まえ、本校では平成28年度に本校版「学びの变革」アクション・プランを策定して後期授業から実施してきた。

平成29年度から順次改訂された特別支援学校学習指導要領においては、子供たちに求められる資質・能力は何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視すること、何ができるようになるかを明確化すること、育成したい資質・能力を明確にするとともに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと、各学校においてカリキュラム・マネジメントを確立することなどが示されている。

本校においては、「児童生徒に育成したい「資質・能力『はつかいち』(働く力、つなぐ、活用、意欲、知識)」を定め、毎年度、教職員対象のアンケートを実施し、アクション・プランの取組に係る成果と課題を明確にした上で改善を図ってきたが、授業改善やカリキュラム・マネジメントの取組を学校全体で組織的に行うためには、それらを統括する組織(本校においては「学びの变革担当者会」)を設けることが重要であり、ホームページ等で授業改善やカリキュラム・マネジメント等の取組を公表し続けることが必要であると考えます。

本校においては、これまでの取組から、授業改善のPDCAサイクルと教育課程の改善のPDCAサイクルをつなぐ枠組は整いつつあるが、今後も学習指導要領の趣旨を踏まえるとともにアクション・プランの実施状況等の根拠に基づき、必要な改善を図る必要があると考えます。

(2020. 2. 14受理)

Consideration for the Actions of Class Improvement and Curriculum Management at the Hiroshima Prefectural Hatsukaichi Special Needs School

Ai KATAOKA

Hiroshima Prefectural Hatsukaichi Special Needs School

Yasuhiro HIRAKAWA

Hiroshima Prefectural Hatsukaichi Special Needs School

This paper summarizes the actions of class improvement and curriculum management at the Hiroshima Prefectural Hatsukaichi Special Needs School. Based on the Hiroshima “Learning Reform” Action Plan formulated by the Hiroshima Prefectural Board of Education in December 2014, the “Learning Reform Association” was formulated at the Hatsukaichi Special Needs School in order to promote class improvements comprehensively. This association was organized by the research department, the academic affairs department, and administrative positions of the school in order to discuss how to improve teaching methodologies and class activities based on the direction of the most recently revised version of the education guidelines by the MEXT. In 2016, this association has finally composed Hatsukaichi Special Needs School version of the “Learning Reform” Action Plan. This action plan focuses on the teaching plan and unit (subject) plan used in daily class activities and creates the evaluation form to assess students’ qualities and abilities that teachers want to nurture for students, which are the work ability, cooperation, application, motivation, and knowledge. In addition, the surveys to evaluate the quality of the evaluation form were repeatedly conducted for teachers every school year to make it a better format. Based on these systematic activities, the Hatsukaichi Special Needs School has finally built the framework of class improvement and curriculum management by positioning teaching plan, unit (subject) plan, lesson making materials, etc. into the PDCA cycles of improving classes and curriculum.

Keywords : students’ qualities and abilities teachers want to nurture, systematic, class improvement, curriculum management